



大和文華館に並々ならぬ好意をもっておられる方々から、これまでも貴重な御愛蔵の美術品の御寄贈を受けたことは二、三の例に止まりませんが、このたびは始めて遠く海を隔てた太平洋の彼方から、長年自分の手許において大事にされていた日本の根付17箇が大和文華館に寄贈されましたので、早速この誌上で読者に紹介し、皆様と共に寄贈者の御好意に感謝の意を表したいと存じます。

寄贈者のお名前はアメリカ合衆国カリフォルニア州のサンフランシスコ市に本部のあるアジア財団と同州のスタンフォードの町に近いパロ・アルトという閑静な小さい町に住んでおられるジェームス・E・オブライエン御夫妻との共同寄贈という名義になっております。それはアメリカの国内事情に因るもので、簡単に申しますと、オブライエン御夫妻がかねがね非常に好意を寄せられている大和文華館には日本独特の工芸品である根付のコレクションがないことを知られ、それでは自分のコレクションの一部を割愛して寄贈しようということになったのですが、税

金関係の問題から、先ずアジア財団に一旦寄附をされ、同財団を通じて、名指しで大和文華館に寄贈されることになったのであります。アジア財団はアメリカの一流の有力者たちによって1954年に設立された民間団体であります。全く営利を目的とせず、また政治、宗教にも一切関係せず、その維持は個人、企業、並に団体の任意の寄附によるものであります。その財団の活動は非常に多方面にわたっておりますので、ここでは省略しますが、日本の大学、研究機関、その他個人の専門学者等でこの財団の援助を受けた例は枚挙にたえないほど多数あることだけをお伝えしておきます。

ここでジェームス・E・オブライエン御夫妻のことを少しお伝えする番になりました。今御夫妻と書きましたが、主役は夫人のメリー・ルイス・オブライエンさんです。この方は根付の集収家として知られている許りでなく、1965年には英文で、根付集収家のための手引書を著わされています。今回大和文華館に寄贈された17箇の中の9箇はその本に図版として掲載

海外からの心温まる贈物

大和文華館館長 石澤正男

されております。その点から見ても前述しましたように、夫人は長年鍾愛された作品を選んで下さったことがよく判ります。

次に17箇の根付を写真に示した番号順に作者、主題、材料または技法の順に列記いたします。

- 1 民玉作 鏡蓋「達磨と孔子」牙彫・銀板鍍金
- 2 杜園(1820—1894)作「狂言師」木彫
- 3 秋月作「福祿寿の頭を剃る大黒」牙彫
- 4 法実作「鳥籠をもつ少年」牙彫
- 5 友親(1800—1873)作「三味線をもつ達磨と子供」牙彫
- 6 岡友作「雄鶏と雛」牙彫
- 7 是真(1801—1891)作「墨」漆工
- 8 松翠作「おかめ蒔絵枕」漆工
- 9 正直作「牡羊」木彫
- 10 九代目松寿(1725—1795)作「牡鹿」木彫
- 11 三輪作「火鉢を抱く男」木彫
- 12 舟珉作「達磨」木彫
- 13 右濤作「鳥天狗面」木彫
- 14 友忠作「牛に乗る童子」木彫
- 15 岷江作「虎」木彫
- 16 江月作「梨を食う蜂」木彫
- 17 乾也(1825—1889)作「道成寺の鐘」緒緒つき・陶器

根付は煙草入やお守袋などにもつけられますが、一般的には印籠、

一層正確にいうと提印籠に緒緒と共に欠くことの出来ない附属品として用いられたもので、江戸時代の代表的な小工芸品というべきものです。印籠に見られる意匠や技法も頗る変化に富むものでありますが、根付の場合はその主題、材料、技法にわたって更に一層変化に富み、愛好家の飽くところのない集収欲をそそるものであります。明治以後国外に流出した日本美術の代表的なものは浮世絵版画、装剣小道具、印籠、根付等で、量質ともに国内に残留しているものを遥に凌駕しているのが実情です。オブライエン夫人の温い心遣いで根付の里帰りが実現したことは誠に欣ばしいニュースであります。最後にオブライエン夫人について少しつけ加えておきます。夫人は大和文華館が1960年10月31日に華々しく開館式を挙行了した時、遙々海外から来訪された多数の外人のお一人ですが、その後もたびたび来日され、その都度文華館を訪ねられております。昨年3月20日の来訪は丁度5度目に当たるとっておられました。その日は珍しく雪が盛に降っておりました。その時「芳名録」に書かれた感想を次に引用します。

「雪の降る日にこの美術館を訪ねてきて、今始めて中庭に竹を植えたわけが判りました。」

大和文華館としてはこのような佳き友を海外にもっていることは大変仕合せだと思います。

季刊 美のたより No.18

昭和46年 9月1日

発行 大和文華館